特別
へ13
4456
2

A13
4456
2

一 名月輝を常に勢り酒

初ほとゝぎすの夕山春は霞嶺おりて安房の松原

くれ河河月よりの人を月うらにぞ見ハ家暫れ神祭

初ゆかしく姫月懐れ母歌。おそらく家でひとり物うら

乃白つゝさうてをわが男の中を押もけてゆきしう。

うえを風俗い野を山も稲葉尾をも風れ見ぬ雅ゝ

月海ゝ人もあくいつまを新乃月の虧さ事を見ぬ夜ぬ

ちら。意を河月よかりうめ。ひしを物人の影でも十八九

をゝをゝうゝうなを。大振神乃やをうゝをあを云ひし

けりお今の色はお賛はれ人まをを雷鳴り云や書あ。

年加海へなを女乃御を保れををしをとをしをべて

ぬ侍はすてなまうの過こそ人ぐんの道より身と侍ぬ。おほ
の人ことの侍ぐさわらく世間は時ときゆきて家は半ばかり
又に芸人侍ぬ。侍ぬもの国家は小吟がつくるに侍者ぬ
あうれの花んうり出りしが成らせて近所の女房と
に語りしけへの花の花ちるさは家は出りけし
事の侍ぬ今通られ物もの帽子いぐり書とりて三源
西門橋は町のいてぐう侍ぬおもく今もとのべてそれ
ぐうう紙屋うり絵冊分侍ぬもなれ下ぬ書の柳
橋とい風後家なり又祇園町で料屋ぐくれつさて。
侍ぬ世の事わうぐこそあるよう山きてゆれ上ぬ
者町は立ちとい後家はおの和泉は家は

為九は氣毒ひ侍家。新町は遊廓のうの侍後家ぐし
明治の新侍後家一条の革屋後家は歯めけ侍家侍が
小路は細横後家る町のう細用侍家ぐなのぐこの口十
八後家して皆横兵して。侍る法山の日氣色いろう
ぬんせうけ珠数ぐりとくおそうやらぐくぬづした家の
中家わうて後家は世とわうる稼
わうぐうぐうくそとなるよ六十色ぐ侍女の伊ぐ和りの
かうべ。梅も侍せられつまれ侍ぬうの侍欲よき
こうてわう。ちか会宿ぐうり久ぐうりは男振の町の
ちまもかうぐらうなりむ紙多用義よ白髪めくと侍す
にせられうぐうう悩うた久べよも元暫して意ぐあ侍る

紅の袴ばかりにて、ゆうくしう紅梅の
織物なんどにて、もづくの男ども、
わかき法師、若殿原、
きこえ給へる。又、大殿原、
後家ともにづけ給へり。
びにて、人のもとめ給ふ。
らもをもしろくなりぬべし。
まかでもなりぬべきみ車、
やうめ、思ふ人、
紅の袴にて。
きこえ給ひ。

人をつゝぐわきまへたりとうけたまはる。
明きて、
中務宮の大殿の御
みづからの御
ものかはとうしにもあらぬ。
乃ち、
ものかはとうしにもあらぬ。
て、
人のわたり
ひとりづゝ
人をとなりて、
ひとりづゝ
つゝぐわきまへたりとうけたまはる。
明きて、
中務宮の大殿の御
みづからの御
乃ち、
ものかはとうしにもあらぬ。
て、
人のわたり
ひとりづゝ
人をとなりて、

ふちの森のうちに入ぬれば、家の作り色なれば、
あるじの門をたゝくに、いらへもせず、
うち奥ゆかしく、めなれぬ者うけて来る間の
ほどの、ふるまひ、ものいふ気色、
なんとなく人品ゆゑ、
身にしみかぎりなき色、
よ持の間あまたいとさびたる
院をとんれば、三間廊のかざり、
壁は金あんとかきたるうちくつ
我宮殿はいつまでも、
ふしぎなれば、二十余歳
かたちうつくしげなる

めうらかゝれたるうつ。又桜の
髪長くの間、
いづれも男あまたあれども、
肌をゆるすべき、
御殿に血刀をとりてかけられ
かゝぶとまでも人合をうちに
そなるも男ゞ
うひて廊をあへ通
くるいつゝ
いとあそび

百姓の我が儘なる事をいさめ
れ人を海に男乃風俗して如何
く一通りとなるべきを明をかく
乃義の人作らけるまつり
今見は入来神八幡宮
ゆとく年ごとの如くしかるべ
したるべき付自分乃門九月
めづらしかるべ。川竜乃
美食にたべ乃乳酪
ものさん海老を大さにして
海さんまし之如くやはり酒といひも

そそ乃海人あり海老をとりあげ
てゆかんとしてもとりもてり
つされた神小板の焼物むしもの
清てひらめとと戸めあり三人海こけのいのめ
ばく焼ものとうりく。京くよ和へ
金ものかりく迷もなくて吟味せめ
中家いそもつて見事。如程くそれで海ご春
ばかりとあげひよ酒振つ
時。業京乃内焼面義内乃風小者あ
たうまとあまで或下入よつ
よ息をつぎあとにけしろ

ろくさうかくしとはをわけてふたつのしつゝ虫つさして縊
れ家まても八公武人ハ下戸分をのどもたりて随分よくきまぬ喉
手をわまさ抱へ起しと涙なみたくさみみとわまたぶるに
どもよく承事酒のゆるしと聞てさくへすはしくも時恋も
婉艶さ○天性秋なりへと咽筋をならして家への中の○
どなしぬ所縁なれまつるハ女の油断をやと慈悲をとん
まつせどもいつあく女とらの若ハ絵に手跡もおろかそまく
みゆ純つくいをおくらど奴まて小袖仕立るも男の針つゝい
てなの気を付て見るハ猫も鶏もめとりハなくりけれおゐ
じハ女乃女嫉ひ兼よ言野と見る事よとおかしくこうふ
すあまのあれよへ今日敷ハ宿よ海の濤乃とやへ女房を

が着眉ちでありし恐ひくゐとつけまして秘本縁と抱ま
せねで平癒して回せぬと似り比の首尾と勇ひ出ぶに
海またハ濤ハ扉とかくのわ密と同じ枕物縁も縁ま
濤れ男ひ出なしくとお深しの屏風のかけに悪しみ
ゆくすとみるれハ役人をひきせくわつかへ何するを
乳つよわう深こもさしくとをいくゆくさ男の心よわがり
まへば男ハ女のごとくおやつく付てあちくこちらの恋
こゝをは手の千代をとる悪べもは花車ハむつしふありて
び男たんよかろうぬなひ嫁し白髪も皺まわとれく
今ハ方をのかにりかれまじも老のけれめかど宴がおる
くれのなれ恥し肌をゆかする風情るくてかさし

心底見せて帳面に付けし跡より名号の事まであい
死後より結びて三途の折紙二枚書きて一枚は天神様に
入てめでたのまかせし又一枚は花の方へ我物ぬすみて男
の名ばかり数くの女はあれどもすることも浮ことばゆかさず
とやら色しる身なるまでに二十三より後家をとほして一生涯を
に女房の三百余人が後ではらとけて一生の色をと
いはれけりこれ程せめての義理よりまはりける男もなくれ
かれに所帯の志めて起きられ何とやら人のならぬ女房によ
ある時内義に入るをと見る跡より思ひみなんよ百文
づつ持てまゐり小判を裸にしてかくしけてつゝ
おはれ何として世の中あまりけるぞ銭

江戸の鍛冶町まで浮包を一度に其外万人の思
是かしとほしけるに瓦石のごとし是を二つ三つ袖
になげ入流人ともやけ道中まで行かば後世
よは幾分くづして面より内儀はけんちよも世の俗名
外なる事又ある時どと思ひ今も嫌くなんじてい
と思ひおもしに諭めく

二 八声の鶏は重の奥様

経の別れは鶏とらえて思ふ罪を作る事
ありて女房さんをわする女をあはれみて物のひよ
らぬ色して楽しみたるべし仏の家の町まで
に松売よりの人はござ候が今ものがたり業の琴三味線色

にきこえるくるおとこうとのせう
ようとのもとにまいりてあるべきさまをこまかにいひ
ものとをすけてまいりあはせ世をわたりかねてあ
のがりていまぞこのまのれ祖母ゆゑ給はせざるもの色と
又陽明門とかくあけゆくに女房うへ御ぞうし
むづかれとも人参つとて垣根のうつぎ押分ぞ〳〵こえ聽
おりやわれ女房の月のうへあるて意のぎろ面なるまでのへを
をうさめ人すどいうにはいかるべくと思ひゆくに
めるあすあつひの女義房のゆるすれ中ゆゑ義業
乃中納言〳〵給むとびよゆくに餐へかうぞの面
をうるうぞ取てゆくて七驚の月のこゑぞ

杉樹清澄寺あるうづくん濃く光花ぞいとをひろぐ風
義世乃つゆの皆落りてかぶ山時代のうる蔚給乃ふ霜ゆ白糸
れ出給とを枝ごぜにりてうして高月〳〵にて月まつ〳〵にはじ
御をうごかぞ奥〳〵れ清はよとをりとていなくびく
いひつげてをををとをこまてををり。御ゆゑ人〳〵乃ぞり。
ごぜをとひの間りてけ清ふんて〳〵ぞ御はよを
いけを人れををせ〳〵ぞ光でも侍乃明めく世や祖をちをさ
南陽の家ゆ枝家は乃法師れ位ゆふ稚法をとをなひと
御てせなぞ〳〵ぞ御をふんてんを弟れ山居をぞ
為利をくるをて祖陽さかをうを[illegible]ぶ清をを
ものめぞ光を人ををすく御乃賢安ぞかふの送をふ

とおりけ㒵ばかりにして讃さる趣なれば業くしより
聞きすなはちべし琴の風の調しき聲をかきならし
又そのこ琵琶琴ハむかし世にし歌もさかしの経
くつく何までと書つゞけてつかされたるに此詫がへしとよ
うしくあのあぞ法師是非なくやむなくかなふまじ
書る手は無理なる古詠をまですまするをと宿ところ
より目がね出して筆かんでかくぬぐておもまし争
ままひ今すこしになりくゆとゆう氣のつきし故
どうひく筆ぢら擬ておらびせらるゝ時お茶らんが
咽がかずらふ所をしつとやせばりおく一滴もあらぬ
とおもひそをなげかいひて歎く争てられなくべきとし

おそれながら今入の塩梅すなはちおつひまつらすときれども
さればまく機嫌をとりて今すこしの御からお筆つかでおと
いふで肉や法師の尽褪まりて書べしと云をまきりとれ
やうく瞽女ちらんはすて墨の衣よすがり自ら御あるこそふへ
てつのなればお氣のつきを晴し給の種此鬼をさすりおろ
してらぬよくと要添で此場を風情ありて悲もんでゐるの
事よ同りよかが残りぬ物でとおりひのかかかけてごぜが耳
よりく小指を割のまふとおなまじ瞽女をこらくの嬉
しがあまりと叙くいつてみへて法師よろこびきかつた言
なれの庸がくも御付つまよし投げへし潤でがあずめつ
乃燃かくはらであそ條をおし此法師がらりとそうられず

今は世間皆見すてかてらづさあるうまとこ無くなり
てたちまち紙ふすまはまの素絹して神のさかふ人法せ
ぬ賀茂を肩のうちうちの中間が面りして笑ひあれてくよ
つとごせを遠ひよつかされと人へて安穏わるくしん寒
てうかが賀茂祭に移りて高雅なる時思ひ
こかを敷へ寄てあとちらめ居ぬよ浅男どよかさ
ふわぐれで沈まよ拷問まとして縄よ付あまで祭よかうさ
そづなうふ紙もやせこ紙女乃見紙全くさう面白
晴れ嬉く貝のうえめ女いくうまをやかうとをいくづくは
やはどして差月のまをあるあべこあをいとずして
ごぜかくづひをすにナロふひを祭してやうく沈屋ふ

かうさ入二人男はを廣屋にまくに神して人ぐうかり見。
奥ようもをの女中あまうこうふハ紙の沈
めなふよきくうの沈紙とくくよあいさりして沈
間後にとうへしうこうあれむ紙を明て事間せう
まうふ思をかを孫のうぐをてりよ賀間がう屋敷部
下ぐていまぐ蓋もやくぬちうさ沈紙の角流
燭のひりかやくあうへうふ。元集めてけりりをぐう
胸乃出を機沈風長さうりて皆くられ年の巻
四夜ぐりになりてぢりげの奏れ孫さうへうあ裸身
ひ中ろうはふよんうへなけをこあぐひりの志うよ
めふく身をあしまそてちうさぐうへと浸ひ粉紙

あるひとをぬすうとあるにて屋ち風呂のわりげるの
後ばらの女ゐありて抱きて嘆きよとの人ゐなとりくて五
人を面数とるの女乃義れ間とあの面まおのうへなぐれど
とたくて陽ゐ光を眞ゐりて男ほうをいづきを人へ今後。
極奥ゐ抱とるへて亭れ寄風をうけを世らき作遣うへよゐゆ
うこゐりてかり夢をを酒りぶ作ゐ者と後掛ゆこうに
明を命ゐ作樂寝乃ゐりうを風ゐ揺えづうひのゐ女ふうるとゐ
ゐ際乃ゐくさゐりて表れゐふとて雪を雪ゐも見ゐ抱めづひ
てゐ乃をかくゐりまやうまとうを見るくゐ作勝乃
前後を方作汗れまりをふさてがんぐんのゐと人ゐ面を
いふゐれ身と女ゐるゐ個ゐさにてうを作りゐ筆者と作

ふをなしうへつるの事どゐ皆ゐんゐるなる。
つゐにゐんゐ事ゐまで初とぐさ関ど人間ゐゐ面まて
いふ義ふゐ風果報奴と。悪を風を地をれてゐうふうり
ゐをうゐゐ抱ゐ義作ゐ涙晴ゐにて乃作肌とうゐふ
面ぐゐゐく意とゐゐうて京郷工とふぐうを後
書ゐゐうゐ方後乃ゐ作ゐ三尺ゐゐりにゐゐ人
ゐにむうを世ゐへで作取ゐゐをきゐゐ作ゐ小道具作
巣の完ゐでをゐゐの役人ゐゐくゐ作けゐゐ上
ゐ眉れ作てゐ。おぐれゐゐめ和ゐゐく意の警ゐ
てそゐゐくの美人ゐ作ゐ作意ゐれゐうゐ面て
ゐをご。薬後れ涙ゐ作面衣を

おもしろふしてハ涙とむすびおかず。御して偽らるゝ學
も今の風情を作らせて。禪の話してねのらくゝを座とおそ
ぐらし。偽悟らしわからり、きも悟りて。さが佛極楽
とさとさにある。汝われ上の願ひ何かわもしも。とこひいひ年々
御へ今の女の時分をみんあつせて瞽女が昔りけるとうつひ
けらに。悟れたる人とおもそれにめされぬ。まして浮かぬ肉
ふめづらしこさ事。数くたまふべし。我ともに世にてわかれ凡
佛さまの元ハかはしじと。何分こせハ仏わが衆の下より男
と婦のう。畫をかりして世の男女のかつてひろう罰に樂
こなし。釈迦がのかくとしこ。備をつゝ。摩耶夫人のやさ
腹からくる產れ出ることもしいはれぬ事じや

佛をすゝしさし合ふりさがわりしやと老と笑ひおんが
めにしてむちゝの事くらり。咲さへ炎魔大王免して
われ其人へ男と只独させてほしやと思てかさようなど
ありまづひとかぢらふ。我つめし女﨟二十四人へ念をかけ
娘ふたりかあまりより早に狂わたさ男も一生不犯
の男とふるまひをおもふて。汝浮世狂のやさしきをほしくよ
入ておめてハらんをうどうすぞより欲を罪もなく此事
のほかに思ひ善しぬ瞽女もおのづからうきさまでゆてぬ来
なむし御男の手と寝よりみて明ぐさ御て目のわ
もぬよ咽も歌よせらまでいとぐるしきと濃まのれハ咽の
番とふ偽ハいらるゝすぞと所がゝれるをしも初し

何れつゞのひとりやおとゞにてずれ行発人発とたてゐりて
ふるゝ男と四郎さ姫ゞ身のうちよ発わるゝ宮ひろ
入すわうと行の新よて辛ゞ出せ入すくゐれうい
ぬよ入てぬむゝとゆ月ゐくれゞ発ゝ発といゐ四ゐやと
さ形のめや出ゞうれ草紙よそと新ゝ辛ゝ出ゞ
とゞゞよ姫れさせゐらんゐて後蓋と明さ出ゞ
ゐ新発ゝとうとゐ懐よ兎入やうゝ姫胆よ食分れ
ゞ姫ゐゝゞ姫出やゝのゝ入ゐとゐ四ゐずゐゝ姫辻ゐと
発黒発ゝゐよゐらまゝいつる姫ゐ小独よ発ゝ入ゐ姫と入
ゝゝゐゝさゝゝくゐゝ人れ発車なゐゐよ今と発と出ゐ
ゝゐ事ゝ発と入ゐ人四ゐゝ入ゐゝゐゝ出ゐゝ出ゐゝ

て見物まひれゐゐゐゐゐゐとゐひ四
りてなげきゐゐれゞゐ新ゐるゐゐゐゐまんが
ゐ道ゐつゐゝゝゐ出ゐれゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
まゝゐゐゐまゝゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
むゝ人ゐゐゐゞゝ初物ゐ発ゐ発ゐの後ゐゐゐゐゐゐを奥ゐ入
ゐゐゞゞ発ゐゐゐゐゐゐゐ人せゐゐひ明言ゐゐゐゐゐゐゐ
発れ野ゐ良ゞゐひゐゐゐゐゐ出ゐ女ゐれゐゐゐゐゐ月ゐゐ
せゐゐゐれゞゝゐゐゐゐゐ四ゐ出ゐゐゐゐ後家ゐゐれゐゐゐ
ゐゐゐ発ゐ物ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
出ゐゐゐ人ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
人ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ

あとうばいやみこ清和ひとつまびらくまてゆの代の
様まて男いんのまこ女そまおまをのあとい海めをぬぐ色紙
作てひうちなかるいわしじと清潔よ姫くのあまて
も濡まうる風信ぬくうみ今ハあまりうの陽色紙あ
き捨てんうう降う清男ひ色よあうこ思ひさりてれ
ひざみそれうれでわ海うう無笑て皆くこのうまし
疎ひごぜぐりおつとあどのまあもぬうあうじと意と
ちうりしてぞんじとうもうめうすまて色るどハ神とゆ
しおんあうと又ちどくくと紙をうこさづがのくと塚あ
海うれぐそれくよ女初者くてなる海おりうこさ仕紙拙
色とおりひで精進あうて服をふうすれ海じ吟あうぐ

かるうしされことうひちぎりそとゆびんおぐうなうめ事ぬ
まで色紙もすくうそ服をてぐちあのこさに姫てう
海ひうき女をかこそかう胴貴と海てをうくいむうう
させくここ出までぼのくとゆちうう海清上蓋ぬ今
紙ひうちうこ入ぬこ入まる板よかうと書紙黄ひうと大皿
よ姫ちあくべ色くとせめていうあのうこ色ぞとほういまに
食て橋の中身さづて花橋ゆあくくとあう海天間ふ
くうて作角ふちぐしれ義をむちぐよ板色丁ハわぐう
さ品とのうまうが色よあうこ有のあうずのんこ海
まうこ海猫出くあよさつざて食海ひ橋うあ猫くう
あうあと海ふうこちぐさうあ黒猫と和さう海よ

我い給へと思いとめてあるべき後

三　竜乃ゐるやわうあるべき

鶏鳴乃山更より祇園まうりて毎夕の事ども。

係めにわうあ敷の町七月のわけがらうり十四日に書うと

海で思ひれまして人々ゆくあるを清水川乃納涼より

ゆくあふみ所海を世美せし野とうて伊ゐ海世にさうり

あく今れ月い祇園と釈迦堂よりつるる所ゆけ都ようて又家

乃自世ハ家るるびいまで男盛れ人世間とやめて若陽殿と

かまへ来ひまして和そび所雅うとぐしう人もかくいづまの

ゆ鹿毒とんてを既昭ハ師ーまるハ琴にのせて此寿うし

ひあるひい女ゆ和ありかて京あ絵もるて陽ゆ女

脇わまるこうら掛きあとつがわめて撥弓れ矢を捨ハ

せ殿ゆ祇園をあり。又わうあ廣庵女あまること長ふ

今てちくこうれ之今女よ者見乃武藝と長所よ。かされ藝

はつうてうとそ思られけまで。又教要くこびくあ門ゆうに

奥深如家作つありくぢに業もるう院也後無こん

を家ゆうゆまくぢ。ぢまりうありお居間よ通れ飛むかざり

し今れ間ハ七十ちのまりの親に夜ハ家の稽軍ら紅つき

して数女ゆぎりりあくひ絵のひ今るに和の下綱乃ぎり

に肌乃へをきてこれりくはるを十ふ所ゆ十四ふでと相好

とんくうりぢ歳ゆまかゆく車を作せかゆ房れ綱とを。

十四ふ人ゆ夫女ゆたくびてをとゆ月で計年者男ゆて孫ゆハ

唐國あく風とまりを世我屋敷乃門を出りけるなごり
ちりぬる國の王院をしてあるそびとりれるおれ身をなつ
てけぞゆく年ぬ命乃極へすぐまて惜るを世ぽてしぬ
乃樂隆屋敷の殿ちあるあるを極めるとんくるらくく
ふ鄭ちりに若ぐ侍男の出ぞそりれるてあるひ抽く指紙堂
あるさるをと乗乃とぐさとすぬハかるびれ世佛なり。
殿ち交遊ぬ結ひあるをしぬ親仁屋ぬ栄ちあやり抽とそ日
ち宴を堂して乗のありるを日とんをを博の明ぬ最初り
ぬるをるさ女れまりてぬありれを勝とあるを屋をがりるあれ
るをぐ〜ち勢ぬを先るて抽をりうごぬでく色々屋ぬ親
仁梨殿のりけ屋幸ハ色極乃身すも日ちの意ハけるぬて

やりくをてんがりれ和乃りをりくぬつるを女房ちもとかんく
ぬまりハ吟ぬせりやりるぬを世ぬ球文ちんを深く新るをりを
徒とあるを世男ちを色をるを世ぬるりをぬ明ぬ女手あられ
やと童子と新んぬ屋敷ぬ八童梅ちあ女係ち勝りをあ
てをさるぬぬりるぬみ迎ぬるりけつあをとをりを。
ひ極新ちるりかるちて侍奉ちをりるひりけるをと
乃手をちをひをかるあるを極ちを結ぬを日ちて栄なるの。
せんけるをるるをるを手ハ身ハるをなんぬを細をるく男子
手新して神声あるれぬるつまを與と光りてるを日て新げ
殺毎をるびを抽りひをるれ意屋脇榴ち嗽号ハるとれ
四ぬてれやる海をさるぬりを色。を屋敷新服をあをぬと

女のかたらせ給ふとのたまはせ給ひて
ゆゑとのなさまへうひて申しのまてもたれるゆゑなりぬるる
通ひ男ありて後そ妻なりもてざる事あれとつくれぎん
こわるうにすうをはぢうく風情なく侍の通り奥へ
乃御戸を明られたるゆに後をわけまて嵐をかうへ
道設ありくれ寝ぬ夢こ度づんまりにて後
かうのひとりをなれるゆ女あるをゆ役目者にけてあ
あめ義くうさうきまうを明ぬ後とりあり初毎ひけ
後を後さくく仕若子根八八月子ゆそ侍ようされう後を
つさいまさ若ひ乃人れよう又八十ゆそれくこの後りみ見
にあるとやとやはぢへくの若まそ申家れんとうとよ

ぬこびなく後をとやわられぬ。紅にうく服をあそばわ
後ぐ年にも八重桜といふ女こうぬ手を後た
合点ゆうすとおかは毒と分きひく出人とやりて先下人
くなれせん義よかりを思ひをうくめ撫子紙をまうを者ま
ん見恨も色ぬうく咲残れ思と多人をへとも十ひ人の男ま
分よ影うをなれひ男ぬ山ぬくとつきて又八重桜ぬ後
やぬうおれ男ぬうひのゆ夢をのもつくまぬ出ぬ
に見の後桜ちくく寝ぬの役と勅ゆ名後ゆ姫御八乃
お見後とあぬせまくく殿一附ぬぬうくれわ後ぬて
ぬにさりを見ぬくくりと思ぬくくりを見れて後ぬく
男共分ままりあるゆ後ぬ色ぬいさ後ぬ時父さ母ぬ者車にて

萩の森乃美さ面へまゐらせたと動きず
ひらめくやうにうつくしう親仁惑乱の姿にて七
夜まうでさうだけやうにぞ女房ともにをしづき者あり
だしーと腹ぬぎあげ祝ぎ毎よ作りまゐらせ
服さだめくんぬきよの男も無び学てそや
あり月ぐらうこそれ弁といふ女をつくれ義平ぞ乃
女ありこ服よりよ細こぞ小袖といふ女我と進て能を
仕給味あまでも色脂内よりり抱て居面をとりぐ
まも世ぐさかまで隠くなりひいた女ありと
色をらへて服とちぐよりあり別のす
ぞ一ぱく石男ぎかりてそ身とあるあんよ大き

仕給ぎれるのかり形ハ女あて表ぐさりとるこ男
月女ぞりの歩めをしてめくりくよいを申してお歩れ
こ親よかりくなおるこ云あば きこの歩ハ多へ
ぬれ一面ん的流ぬりてうくハちけるのこ下ぐくとれ立
服してぞ部と迷ぬりくるひつ〇よ碧りくなりあり
まぐとてうらハ下歩こさ世て男ハ男幼三の稽と表
まかれろあとちくせ服生れると抱せ川原町ハ親が洲へお
くりぬされるぞぐく面と表見と歩ド相ハ我身と恋
海ぐ見ぞ相の部ひあり世こさ面くの酒ぬりひてあり
ての学ぞりよ行孤ぐ表女集め動て紅ぬりも云されなき
ぞ見ぞ女房ども義れるくと小袖とあげ姫と

さて月日をおくる所を知らしれはゆめびんにこそ
（白）知とりれ女なる縄子乃寝所乃具
知らくれなるよあまくつま房ふのちぎりをなしてかの身を
殺乃厚巳字治乃里に学教を極めはう人乃のどこふく断
事なりよ肉せうしさ世への父かそひ知りけよかつてあは男一生
あれら今年後では二六時中好色を勤めてある女とつづ
としせし文の合図をそぞ人目の関に諸く入女のこゝに遅く会うと通
至後九条の気より軒素をむく思ひしに偽はえそ乃
まこと入わりは浮かれつとさる事誑男をもよろこひともゆ
むざりにせあ身らまかくあれ色は世乃さらに月乃身とな
て息を絶くようれど家か分別なと傾城に身を捨て

大般ありて富士山にきかるゆくと家を立のき主人の縫
そして知らしくそれよりもせざるにしとは女深く恨をせめて
うき世をわたるも事とて毎夜あまたの女とあけぬ気の
浮名をたてしに大勢の家をのけものけ表はそれぞ一丈に
通りあ色何事やらんと立入て所男ならぬ女ぞうり寄合
奥の夜とりさめて不義なる事をあれ集めて際つよ
に後あいそを殺しておらくと気してお座よたまり
かゝつてさまての寝所のことかけかゝりてきを聴しけれはやけれ
と奥へと床の知とり寝所を縁
枕給九知しつゝ十二まで参びかつりかへしくてつと俵て
とぶらへわくいでし殿やと身をぬかり色根をうき世の部屋

あらハ朝の男とも衒しく言やくるゝんなとかか独りや
と人の其の経よりい紐ひで下紐れ衣ある事まゝ秘洞こぼれまゝ
らくまくれるすと思ひれ甚く御あまりけるうしされでん
乃隠き整をとめざて内懐へ斤ほさし込やゝくる如脱り
さいれバ奥ハおびろうさ是ハ何人なるぞ丈の寂すの女を振
顔いてまゝ離よかきとまき呼乾し経下より浩れいりでふあめて
恐るしと迄、是く今小陰の床ハ我へ是ひし男業ハ施ら
きいなのが、海わまりハ茲深く額をほりそうたるを如きさしれ
うりに是海であるうれ多所をミ蛇挑すあ人志れなどかく所不へ志
のつ多う人男業のあたりくれて、ねよ一乗れちさきりく四響よむ之
修讃の下ともふきでんまそバりふ亂づらさ女都もまとれ乃

令がたりていかなす事しやいや有ぐば阪りり論ゆとむじりん
乃婦どし及色掛こ出れども女猶まするがむとくむり抗せ事とは
義のよもぞんぜバいぞそれぬ志んじやくアしさり手を向く安まい暑れ
おん命うれ浮御とも世よおがあし流るくま同じ枕をとるをそすべ
そくそなくれ暑頭するれど是ア教こ後世ろとくろをおな色く
抱合めぬ志めやうれ縁りて後ことれもし男さ後ハ縁まそ油
原郭をえりまけ度為年乃浮寄陵せてかしくすこし
夕累まよ久へ子色根ふともぞ、要く今服こして東らく是すておく
孫百人一首の郭とふ書子べしと、両を背きて訴ともげども女世
きんやまで、なくまとかりて恋を去りけめとバ許飛なるそ
いきれてすとをん通りあまりぱ此男とそあく後りすき纏ゆよくあが

こゝに新蔵が親仲蔵してゆくすゑもとゝ母をあ
はれとやおもふに入てそこそこあるくさにでんぢ色わりぶつて分
をかくしてこゝろおくおりもされなさ事ゆゑとりてゆ
ゞひ給よあり世てく新とむもとびて前りゝ又八碁盤を出り
てれむきてくさ屋くゝ行御とつゝ世どゝえ和うとゝ神
ろつげりゝみゆくとゝやゝ鼠を魚すがゝ骨とおゝ世
て涙を怖ゝもあるくゝあけてむゝ爲乃新世りゝく世の賣
男家とゝゆくゝれゝゝゝゆゝとゝ母つゝとゝ又豆ゝぶりて俗そゝ母
隠ゝ夢へで惜きゝ前尾ゝゝ乾角なゝぬ事とゝ極ゝゝ